

## シュライエルマッハーと ヘルンフート兄弟団

武 安 宥

### (一)

マーブルク (Marburg) からヴァルツロフ (Warzlov, 旧ブレスラウ, Bereslau) への道程は遠かった。それでもそこはシュライエルマッハーの生誕の地であったことが、気持ちの上で長くは感じられなかった。ポーランド国内の平坦な田園をひたすらバスは疾走した。目的地の約 150 キロ手前で道路標識が左ゲーリッ (Gölitze), 右チトー (Zittau) と表示しているのが目に入った。それぞれの地はまたニーISKY (Niesky), ヘルンフート (Hernhut) に通じる起点でもあり、若きシュライエルマッハーの遊学の地に他ならなかった。

ことのほかヘルンフートまたこの地の兄弟団 (Brüdergemeine) とシュライエルマッハーの関係は格別なものがあり、今もこの地がかつて18世紀ドイツの精神世界で異彩を放ったツィンチェンドルフ (Zinzendorf) の活動の基点であることに代わりなく、世界各地に多くの宣教師を送り続け、現在 (1986年) もなお約43万人といわれる自称ヘルンフーター (Herrnhuter) を生み出している兄弟団の中心地であり、豊かな緑に囲まれたこの小さな村にはチンツェンドルフ伯縁の人々、建物また教育学者としても著名なビェティスト、コメニウス (J. A. Comenius) の名前を冠した村で唯一の書店もあるという。勿論、教会も兄弟団に属し、その簡素な造りの上に「喜びと希望」の象徴である白一色の建物の内外は、礼拝の儀式を執り行う場所としてよりむしろ「喜び」を持って共に集うそれとしての趣があるともいわれる。ともあれこの地にはそのよ

うにして今なお兄弟団の清新な信仰と精神が生きているのである<sup>(4)</sup>。

また『Losungen』（日本語訳「日々の聖句」）と言われる小冊子は、この兄弟団が1731年に第一冊目を出し、1761年度版のそれをツィンチェンドルフが編集して此の世を去ってからもお、今日に至るまで毎年発行され40程の国語で読み続けられて来ているのであるが、1992年版の262冊目には、ヨハネ、16、33の聖句、＜あなたがたには、世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。＞と共に、先のコメーニウスの生涯の終わりの言葉、＜私はイエスを発見した。彼は私の中の全てである。私の全生涯は巡礼（Pilgerreise）であった。いまや天の故郷が目の前にある。その敷居をまたがせてくれるのは、我が導き手、我が光、わがイエス（Christus）である。＞が巻頭に掲載されている。

ところで、このヘルンフート兄弟団がボヘミヤ兄弟団と「敬虔主義（Pietismus）」に由来する福音主義に基づく自由教会（Freikirche）であることは周知の通りである。そしてこの敬虔主義が17世紀後半から18世紀前半にかけて既に教条化していたルター派正統主義に対する批判として信仰の覚醒運動（Erweckungsbewegung）を引き起こしたこともまたよく知られていることである。しかし、敬虔主義を単にそのような意味に限定するだけではなく、即ち、17世紀後半に始まって、シュペーナ（Spener）、フランケ（Franke）等の運動を頂点としながらも、単にルター派、改革派の両教会を貫流し、ツィンチェンドルフのような兄弟団を生み出した、と言う意味においてだけでなく、今日においてもなお決して絶えることのない大きな潮流として理解されなければならないものでもあることが十分に認識される必要があろう。

それというのも現代ドイツにおいて、この敬虔主義の継承を認知することが可能であるキリスト教団体（Deutscher Gemeinschafts-Diakonieverband, ドイツ・交友・奉仕団；略語 DGD）が存在し、しかし、これがランデス・キルヘ（Landeskirche）の内部にありながら、それとは独立した団体として宗教活動を国の内・外において展開しているからである。その意味でこの DGD の信仰覚醒運動は、言わば教会内運動としてドイツ敬虔主義、従ってまたシュライ

エルマッハーとの結び付きで理解され、その特徴も見出さなければならないであろう<sup>(2),(3)</sup>。

筆者は1986年から翌87年にかけての滞独中に、このDGDの本部があるマールブルクに居を定め、ここの本部はもとより現在7施設ある国内のムッターハウス(Mutterhaus)の内、北部のAltvensburg(Vandsburg, 1945年以後Lemförde/Hann)と南部のHensoltshöhe(Gunzenhausen)、またマールブルクにあるTaborと称されるブリューダハウス(Brüderhaus)、さらに海外伝道施設としてオランダのアンメロンゲン(Amerongen)にあるムッターハウスを訪れ、並み並みならぬ歓待を得て、Gemeinschaftsbewegungという敬虔主義的な現代のキリスト教改革運動の実践を些さかでも見聞し得る機会に浴することが出来たのは真に幸いなことであった。

いずれの施設においても、そこでは創設者、C. F. Blazejewski (1862—1900) が1899年10月20日に当時の東プロイセン、ボルケン(Borken)で四人の若きシスター達と共に始めた時の、イエスの愛を中心にした信仰の覚醒、交友の喜び、奉仕と希望の精神が生かされており、訪れた交友仲間、客人の誰にも、“神が私に為されたことが語られ”(Psalm 66, 16), “神が貴方に善きことを為された、そのことを忘れるな”(Pasalm 103, 2)と呼びかけられるのである<sup>(4)</sup>。

またこのDGDが日本とも深い摂理で結ばれており、海外伝道会マールブルク・ミッションは1951年に関西で伝導を始め、1985年には神戸市にムッターハウス(名称ベテル)を創設して福音を宣べ伝え、奉仕活動(例えば、関西学院大学でのドイツ語バイブル・クラスはシュベスター B. Fleischmann, I. Westersfalによって半世紀に迫らんとする歳月にわたって継続されている)が行われていることを忘れてはならないであろう。

## 註

- (1) E. Schuffenhauer; Der fortschrittliche Gehalt der Pädagogik Schleiermachers 1956, Berlin, SS. 9-27.  
鵜殿博喜, ヘルンフトを訪ねて, Brunnen, Nr. 284, Juni, 1986, Ikubundo Verlag, 5-7頁

- (2) Erich, Beyreuther ; Geschichte des Pietismus, 1978, J. F. Steinkopf, SS. 9-227
- (3) 芝田豊彦・美栄子, 現代ドイツの敬虔主義—DGD の活動を通して—, 『千里山文学論集』, 第36号, 1988, 94-107頁
- (4) Hans Bruns, ER wirkte, es wurde, Verlag der Francke-Buchhandlung GmbH. S. 7

## (二)

1770年5月24日の夜、プロシャ軍の一騎兵隊中尉が部下と共にヴァイクセル河を渡ったのは、ポーランドの境界地ザイタース村からファルツ州住民の改革派信徒をプロイセンの領地に連れてくるためであった。と言うのも当時その地の領主がローマ・カソリック信徒であったため住民がひどく圧迫されていたからである。勿論、彼はフリードリッヒ大王の命令に従っていたのであるが、大王はこのシュレジアの従軍牧師ヨハン、ゴットリーブ、シュライエルマッハー (Joh. Gottlieb, Schleiermacher, 1727—1794) を通して、この地の信徒衆を配慮してのことであった。このようにして上部シュレジアのプレス (Pless) に拠点地としての属領地ができ、1778年シュライエルマッハーが移住して、教会の聖務を自ら引き受けることとなったのである。彼の息子ダニエル、エルンスト、フリードリッヒ (Danel, Ernst, Friedrich) は当時10歳であったが、この時から彼の家族と兄弟団 (Brüdergemeine) の関係が始まったのである。

この兄弟団の創説者、チンチェンドルフ (Zinzendorf, 1700—1760) が去って後、この兄弟団の有力な説教者として J, リスラー (Jeremias, Risler) が神学上の基本的見解を堅持しており、またシュライエルマッハー指導下にあつて兄弟団のキリスト教精神の代表者でもあったクリストフ、パウリー (Christoph, Pauli) も自分の息子たちを兄弟団に所属させ、自らもシュレジアのグナーデンフライ (Gnadenfrei) の兄弟団と関わっていた。このような状況の中で、シュライエルマッハーもこの兄弟団を「キリスト教における特殊な現象」と見做して注目するうちに、彼一家もまたこの兄弟団の知己になることを念願するように

なった。その後母親カタリーナ マリア (Katharina-Maria, 1737—1783) が子供たちと一緒にこの地に長期訪問をした時、息子が宗教的な感動と強い印象を受けたため、一家はこの地の兄弟団に所属する決心をしたのであった。

息子ダニエルは15歳で上部ラウジッツのニースキー (Niesky) にある兄弟団の学校に入学した。ここで彼は後に兄弟団の監督になったアルバーティニー (Albertini) との親交を結び、また新人文主義の模範の生徒として常に新鮮な感動を覚えつつ、特にギリシャ古典の研究に専念すると共に、他方では内的な宗教生活、即ち、キリストとの交わりを唯一大切にして新鮮な感動と喜びとの日々を過ごしていたのであった。当時既にグナーデンフライの兄弟団女子寮で生活していた姉シャロット (Charlotte) に向かって憂鬱にならないように警告さえしている。それというのも一般人がヘルンフトの人々が意気消沈した人々の群れであるとの思いを強くしないがためであった。

シュライエルマッハーがこのような恵まれた歩みの中で、時折乱れを感じたのは「イエスを十分に愛していない」、即ち、「自分がイエスの光栄に全く値しない」と感じる時であり、それは言い替えると「イエスとの日々の交わりが乱されたり、途絶えたりしている時に他ならない」。それでも「イエスのところに行くたびに、罪人ではあるが、イエスの恵みにより祝福され、また恵みの眼差しをイエスに希う度に、そして何度願いましょうとも、私達は決してイエスに失望したり裏切られたりすることはありません」<sup>(4)</sup>と述べている。

ところが彼がニースキーを去って2年後 (1785年)、バルビー (Barby) の同じ兄弟団の神学校に入学してから、彼の考え方や感じ方に大きな変化が生じることとなる。それは彼がこの静寂に包まれた神学校で生活をする内に、宗教的深い疑惑にとりつかれ内的激闘を続けなければならなかったことである。しかし、このことが19世紀の福音主義教会の発展に決定的な意味を持つてくることになる。

この神学校で彼がそのような内的困惑状態に陥ったのは、この兄弟団の敬虔な信仰やこの信仰に基づいた人文主義的教育によるためではなかった。むしろこの信仰や教育は彼にとって生来の批判的素質に内的充実を得させ、充足させ

るために与かって力あるものであった。そのような神学上の疑惑は既に少年時代からのものであり、この神学校での生活の中で「伝承されてきた教義」についての疑惑が再燃し、これに関する満足できる考察が得られなかったのである。即ち、永劫の罪と報い、イエス・キリストの償いの罪の苦悩、自然の墮落と超自然の恵みの働きについての教説が問題であったのである。後者の問題は、既にグナーデンフライにおける祝会に出席した体験を通して始めて引き起こされて来たものであった。しかし、その学校での勉強中はそのような疑問は完全に消滅していたのであったが、今やこの神学校での神学研究の開始と共に疑惑は再浮上してき、若き日々の内的安らいを乱したのである。それは伝承されてきた教会の教義、即ち、キリストの形而上学的神性と彼の償いの罪の苦悩の二点に他ならなかった。

この精神的に豊かに恵まれた若者の体験において、問題はそのような単に神学上の理論的な懐疑にあっただけでなく、また宗教的生活における拒みがたい要求にも生じていた。それは「世俗と懐疑的理解との合力に反して救われる」ことが重要なことであった。即ち、「生じてくる全てのことに關して一切の快・不快から解放され、ただ真理感情のみが働く」と言うことが肝要なのである。彼にとってはこの世における空しい存在こそが恐ろしいことであり、ヘルンフト兄弟団のような気の置けぬ場所こそが懐しい所にほかならない。その意味で、彼はハレ大学に行くよりもむしろ兄弟団に行くことこそが好ましかったのである<sup>(4)</sup>。事実、彼が「父の信仰を精査し、思想や感情を先代の塵芥から浄化し始めた時」に、彼を援助したのはまさしくこの兄弟団の内に成り立ち発展していた「敬虔の感情 (Frömmigkeitsgefühl)」に他ならなかったのである<sup>(5)</sup>。

日頃、常に彼が交わっていた救い主、イエス・キリストが、疎遠に思われたのはイエスを形而上学的神性の観点から思う時に他ならなかった。また救い主が人間の不完全の故に神によって罰せられる、と言うことが彼の宗教的感情をひどく悩ませもしたのである。というのも彼が宗教を心情の事柄として精通し、また真に人間的、歴史的に明らかな救い主の人格、即ち、神の愛の担い手に緊密に結合していることとして理解していたからであり、また、この救い主の生

きた親しい人格が形而上学的概念に解消されとも思われなかったし、さらにまたこの人格がこの世にあるのは単に正義の要求から犠牲に捧げられる存在として見做される概念で正しく把握されとも考えていなかったからである。むしろ、彼はそのような概念は打破されなければならないと信じていた。当時彼には既に別の直観法 (Anschauungsweise) が明らかになっていたのである。従って、当時の神学校の指導者達の課題は、内的苦闘をしている者を単に霊的助言で支持するだけでなく、また学問的指導を行い、適切な教義上の根拠に基づいた教義の宗教的意義を、正しく理解できるように援助して行くことが必要であったのである。

しかし、この兄弟団の神学校でキリスト教の神学上の問題を学問的に追求し、「心の宗教」に基づいたキリスト教信仰と哲学的教化との統一を真面目に試みることは困難なことであった。その意味でこの兄弟団は、17世紀末頃から伝承されてきた教会の教義に依ることを専らとし、その頃力強く、高揚してきたドイツ的教化、従って神学的領域に於ても強力な影響を及ぼしていたこのドイツ的教化には無縁であったことになる。しかし、またシュライエルマッハーの「直観法」には「有害な毒薬 (schädliches Gift)」が嗅ぎ分けられ危険視さえされるほどであった。友人も叔父シュトウベンラッホ (Stubenrauch) でさえもがそのような彼の傾向に対して決して寛大ではなく嘆きさえしている。しかし、結局、彼は1787年にこの神学校を去ってハレ大学に進学するのであるが、この神学校の名誉校長であったチェンブシュ (Zembsch) が後に述懐したところによると、当時の教師達の資質や能力は決して十分に吟味されていなかったし、神学者達のそれらもまた大いに疑問視されるべきものであったと、実に当時の神学校の欠陥がそのような人物によるものであったことを明確に指摘しているのである。そして、シュライエルマッハーは神学校での「心の宗教」とハレ大学での「人文主義的研究」との統一を実現することが可能となり、精神的に生き生きとして調和の取れた青年に発達して行くのである。

彼もまたこのようなことを後になってからも喜びと共に振り返り「バルビーでの3年間は私にとって最も素晴らしい青春の日々であった」<sup>(4)</sup>と語っている。

しかし、上述のようにバルビーの神学校は人文的に良く教育された生徒達に、時代の哲学的な教育と兄弟団の信仰を正しく媒介することは困難な課題であった。このことは単にシュライエルマッハーだけでなく、彼の多くの友人たちもまた同様の体験を持ちこれを解決することは出来なかったのである。とは言うものの、シュライエルマッハーが後に神学者としてキリスト教信仰と新しい文化の正しい結合を自らの課題として解決に取り組んだ時、これが可能となったのは他ならぬ青春期を過ごしたこの兄弟団において直接に会得した成果によるのである。ここでは大変な内的苦闘があったにも拘らず、否、そのためにキリスト教を単なる教義、またそれに基づいたキリスト教としてではなく、心から「私の救い主」が生きておられる確信と、これに基づいたキリスト教観を体得して、人間と信仰の結合を真に実現させることが出来たのである。

#### 註

- (1) Aus Schleiermachers Leben in Briefen. Berlin 1860, I. 32.  
 (2) a. a. O. I, 318. (3) Sämtliche Werke I, 202. (4) a. a. O. II, 21.

### (三)

シュライエルマッハーは自己の決定的な出来事が兄弟団の中で一構成員として生活する内に生じたことを認めている。宗教的諸問題に対する彼の逞しい想像力の基盤は既にグナーデンフライにおいて形成されていた。そして彼はそのことに対して心から感謝している。と言うのも一般的には思考様式は理論と観察によって形成されるのであるが、彼の場合は彼自身の生活史の成果であり、その表明に他ならないとみなされるからである。自己の思考様式がそのように熱意あふれた生活の中から形成されてきたものであることに自負の念を抱いてもいたのである<sup>(1)</sup>。そして「この兄弟団ほどに、良いものの最初の成長から1802年の今日に至るまでの私のすべての精神的歩みの生きた思い出を引き立てくれる所は他に何処にもない」<sup>(2)</sup>と証言し、また「この兄弟団において、まず人間と高い世界との関係の意識が生じてき、私にとって本質的であるような神秘的



な要素が発展・展開してきたのです。そしてそのような素質があらゆる懷疑の嵐から私を救済し、支えてくれたのです。当時、そのような素質が芽生え、今ではそれが完成されていて、私もまたあらゆる面でヘルンフート信徒となっており、しかも高いあり方によってであります。」<sup>(9)</sup>と述べ、さらに「ヘルンフートの学校」において「文字の束縛からの自由に対する 内的生命」<sup>(10)</sup>が栄えるとさえ言い切っている。そして「私が兄弟団にあった時、それは私の青年期の最大であり、私の生命の全発展・展開にとっての 決定的な 時であったのですが、その時期において私はまさしく私で有り得たのです」と、また「この通過点が私には一面では偶然のように、しかし他面では必然的で兄弟団なくしては全く自分を考えることが出来ないように思えるのです」と彼はエーベルスドルフ（Ebersdorf）から書き送っている<sup>(11)</sup>。

上述のような彼の確信は兄弟団への個人的で親密な依存を明示する根拠づけとして十分であろう。1805年の復活祭にバルビーでチュンブッシュ校長に再会して、嘗て 彼がこの兄弟団に快く 迎え入れられたことを感謝し、校長からシュライエルマッハーのいた時代がこの学校の 最盛期であったことを 知らされたとき、彼の喜びは大変なものであった<sup>(12)</sup>。そして「長いこの人生航路において、政治家に次いで影響力のある者は、有能な教師を除いては他に誰もいないことは言うまでもない」<sup>(13)</sup>と彼は 尊敬すべきこの旧師を その 死後 そのような美しい言葉で偲んでいる。またニースキーの兄弟団の学校で友愛を結び、深い親交のあったアルバーティニー（Albertini, 1769—1831）のことは彼の生涯に亘って長く愛すべき記憶として留まっている。後にこの兄弟団の監督になり、詩人であって 宗教的歌曲の 作詞者でもあったこの勿頸の 友の死が 伝えられた時、彼は 当時の監督に宛て 次のように 書き 送っている。「このことは教会にとっても また教会外の 愛すべき敬虔な人々の 魂にとっても 手痛い損失です。しかし、新しい萌芽がたえず再び好都合にも生じてきております。……兄弟団や教会において個人の名声に基づくよりも、共同体における福音への忠実と正しい理解に依ることの方が意味あることであり、個人の優れた備えが必要であることも 益々減少してくるに 違いありません」<sup>(14)</sup>。また彼との若き日を兄弟団

で共にした体験を振り返って、彼が兄弟団での生活を不動のものにしていたのに対し、自らは諸々の闘いを経る中で人々の様々な誤解に直面しそれを超克しつつ、一つの目標を掲げて同じ仕事をする場合、並み並みならぬ勇気が必要であることを確信するに至った、とも述懐している<sup>(9)</sup>。

#### 註

- |                       |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| (1) a. a. O. I, 7.    | (2) a. a. O. I, 294.  | (3) a. a. O. I, 294.  |
| (4) a. a. O. II, 21.  | (5) a. a. O. II, 331. | (6) a. a. O. IV, 113. |
| (7) a. a. O. IV, 156. | (8) a. a. II, 455.    | (9) a. a. O. II, 455. |

#### (四)

このようにシュライエルマッハーは兄弟団との生きた内的関連の基盤に基づき、自らの偉大な生涯を生きて諸活動を遂行してきたのである。従って、そのような諸活動の随所に兄弟団の影響が認められ、彼の思考や視点が兄弟団的であることは粉れもない事実である。

ところで教会の中心的な儀式が「礼拝」にあることは言うまでもないことであるが、彼のこの点に関する見解にも兄弟団のそれが濃厚に反映されており、礼拝の様式などは兄弟団のそれを彷彿とさせるものであることは明瞭である。1801年二度目のベルリン生活に入っていた頃、彼はしばしば姉シャロッテにあてた書簡の中で、兄弟団とそこでの礼拝に触れ、特に降誕祭や歳末、新年や復活祭などの朝夕の時刻はそこの聖堂での清楚な礼拝儀式が懐しい宗教音楽と共に思い出されると述べている<sup>(1)</sup>。

また1805年にはハレ大学の礼拝様式の整備・確立に参画し、様々な制約の中で苦慮しつつも兄弟団の礼拝の最善最良なものを吸収する努力を試み、これが当時いまだ若き神学者の後年の礼拝活動の典型ともなるのである。この年の3月の姉あての手紙には、思い出の地バルビーでこの年の復活祭を祝したことが語られており、それは素晴らしい教会音楽が聖堂に満ち受難史が語られ、キリストの死の瞬間が偉大な宥和の理念として表明された力強い祈禱で終わったと

生き生きと伝えられ、また今の時代のキリスト教世界全体にキリスト教の敬虔さに相応しく執り行われ、確実に目覚めさせられるような公的礼拝は「兄弟団の他には何処にも、ありません」<sup>(4)</sup>と、率直に表明もしているものであり、彼のような敬虔な信仰と愛の人にとっては兄弟団の礼拝の様に簡素、素純で、万事が時の流れに委ねられ、真に生きた聖霊に鼓舞された信徒の集いはなかったようである。そしてそこでの聖餐式を始めとする全ての礼拝儀式は「礼り」、「賛美」、「黙想」が中心になり「言葉」は出来るだけそれらの背後に退き、信徒の誰もが神賛美の礼拝に生き生きと自主的に集い且つ結び合わされている思いに深く満足させられる、と実感していたのである。

その後、彼は「宗教の墮落を防止する方法に関する鑑定」を表したが、ここでもまた基本的には兄弟団の範例に照して礼拝は神を賛美する賛美歌が中心で、これを共通 (κοινωνία) に誰もが自主独立的に信徒として宗教的共同体の構成員になることを旨としたのである。従って、宗教的印象や心情は「説教」によってよりもむしろ「音楽」によって与え養われ、その価値が一段と尊重されなければならない<sup>(5)</sup>。従って、兄弟団の礼拝の範例とキリスト教的コイノニアの思想の一致・合体の表現こそが、彼の模範的礼拝儀礼の理想に他ならなかったのである。彼は既に1793年、叔父にあてて「現在のキリスト教界はイエスの根源的意図に全く一致していない」ことを訴え、そこから「国家から自由な教会」を目指し、自由で自主的な教会共同体の思想を表明しているのである<sup>(6)</sup>。また1799年の所謂『宗教論』においてもこの問題に言及して、国家と教会の結び付きを「墮落の源泉」<sup>(7)</sup>と指摘し、この結合の分離を厳しく強調し続けると共に、それが事実上不可能なことを認めつつも、他方で聖職者と平信徒との対立の解消や象徴の拘束からの解放を要求し、誰もが自主独立の自由な「兄弟の同盟」<sup>(8)</sup>の成立下で、真に宗教的人間の共同体としての福音主義教会を打ち建てて行くことを自らの課題・使命として自覚し、それを引き受けていたのである。

既に1803年、彼は福音主義教会の統合 (Union) を要求している。そしてその要点は教議にではなく、礼拝様式に特に聖餐式を共に執り行う、と言う点に

置かれていた。そしてそのことを強く要求している。即ち、国家は少なくとも教会の内的事項に対しては自由を尊重し、教会は自主的に自らを管理する共同体でなければならない。換言すると、教会は長老・会議制度（Presbyterial- und Synodalverfassung）を通して自主管理の正当性を明らかにし、「礼拝」を尊重した「神の家を打ち建て」<sup>(4)</sup>、そこを整備・組織化して真に「新しい生命の通った教会共同体」<sup>(5)</sup>にすることであった。

このような考えの根底には、勿論、兄弟団のことが前提としてあり、1823年に明らかにした「二人の優れた福音主義信徒の対話」でも、兄弟団のような敬虔な深い宗教的心情の持ち主が信仰賛歌や賛美歌を中心にして集う所では、一切の墮落に全く無縁であり、国家から自由な教会が構成員一人一人の「良心」に基づいて自主的に形成され、総てが霊的に支配し、支配される所になっているのであれば、そのような宗教共同体は総ての秩序や統治をただその構成員からのみ産出し、その管理もまた彼等自身に委任されることが可能であろう、と主張するのである<sup>(6)</sup>。

しかし、シュライエルマッハーはかつてルターが自己の真のキリスト教共同体に執着した程に、自らそのような考えと計画の実行、実現に執着することはなかった。とは言うものの、兄弟団が常に国家から自由なキリスト教信徒の共同体であり、自主独立教会として存在すべきである、と言う確信に変わりなかった。彼にとって兄弟団はまさしく「霊的故郷（geistige Heimat）」<sup>(7)</sup>に他ならず、この財宝を悪戯に教会変革のために下落させたくなかったことは言うまでもない。このような思いは先の「対話」において主張される既に10年前の1817年8月、エーベルスドルフ（Ebersdorf）から妻に宛た書簡の中で表明していた考えの言わば最終的結論であり、そこでは兄弟団が「時代精神に沿って変容しつつも、全く素晴らしい羨らやむべき何ものかで有り得る」<sup>(8)</sup>と見做していたのである。そのような訳でこの福音主義教会の規約・規定に最初の合目的性を与えた人物、シュライエルマッハーは、終始「ヘルンフーター」としてあり続けたと言えるのである。

## 註

- (1) a. a. O. I, 264.      (2) a. a. O. II, 23.      (3) Sämtl. Werke V, 108.  
(4) Aus Schleier. Leben in Briefen III, 53.      (5) Sämtliche Werke I, 340.  
(6) a. a. O. I, 355.  
(7) Schenkel, Fr. Schleiermacher. Elberfeld 1868. S. 347ff.  
(8) S. W. V, 186ff. Vgl. auch S. W. V, 219ff.  
(9) Bernh. Becker Schleiermacher und die Brüdergemeine. Monatshefte der  
Comenius-Gesellschaft. III. 1894. S. 60.  
(10) Briefe, II, 331.      (11) a. a. O. II, 331.

——文学部教授——